



『佐藤素拙傳』と大槻文彦

SATOSOSETSUDEN TO OOTSUKIFUMIHIKO

担当 石澤夏巳



わたしのことを
知ってください。

- 寸 法: 幅15cm×高さ23.5cm
- 著 書: 大槻文彦
- 発行者: 佐藤喜六
- 刊行年: 1921(明治45)年

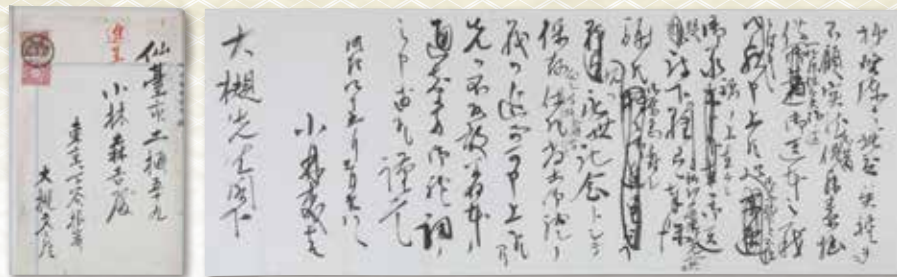


晩年の佐藤素拙

佐藤素拙、その人生と人柄

本書は、幕末から明治にかけて伊達家に仕えた佐藤素拙(保太夫)(1812～1886)という人物の伝記で、国語学者の大槻文彦によって著されました。

佐藤素拙は下級武士の家に生まれましたが、出世をかさねて幕末仙台藩の財政を担いました。戊辰戦争の後、政治抗争によって藩を追われ各地を転々としたあと、家族と東京に移住。1871(明治4)年、60歳の時、旧藩主伊達慶邦から説得され、伊達家の財政管理を任されることになります。また伊達家が開業した質店の宮城屋と、品川にあった仙台味噌工場の経営にも携わりました。木戸孝允から明治政府で働くことを薦められたこともありましたが、それを頑なに断り伊達家に仕え続けました。素拙は家族や部下に対しとても厳しい人でしたが、気分が乗ると人に三絃を弾かせて、小唄を謡うこともあったそうです。



【写真】

左: 小林森吉に贈られた際の、封筒の宛名部分。本書最終ページに貼り付けられている。
右: 献本に対して、小林が大槻へ礼を述べた手紙の下書き

大槻文彦と郷土史

国語辞書『言海』などの編者として有名な大槻文彦(1847～1928)ですが、彼は宮城県の歴史に関する研究も精力的に行っています。

明治時代の半ばから、郷土の歴史を顕彰しようとする動きが宮城県でも盛んに行われるようになりました。こうした活動に大槻は深く関わっています。例えば、伊達家爵位の昇進運動。「爵位」とは、江戸時代に大名や公家の身分にあった「華族」に与えられた称号のこと。旧家臣たちは、5段階中の3番目にあたる「伯爵」だった伊達家の爵位を上げようと考えます。その際、大槻は宮城県知事に提出する請願書の下書きを作り、伊達家がこれまで天皇のために忠義を尽くしてきた歴史をアピールしたのでした。

また大槻は『伊達騒動実録』をはじめとする、仙台藩や伊達家に関する本も数多く執筆しています。今回紹介した『佐藤素拙傳』も、その内の一冊にあたります。こうした大槻の活動は、宮城県における郷土の歴史の捉え方に大きな影響を与えたのです。

ところで本書は、大槻から仙台市の小林森吉という人物に献呈されたものです【写真】。大槻は自らの手で、非売品だった本書を知人に贈っていたことが分かります。

引用・参考

- ・菅野正道 2012 「明治実業家列伝⑧ 佐藤素拙」『飛翔』2012年8月号 仙台商工会議所
- ・栗原伸一郎 2016 「大槻文彦と伊達家爵位昇進運動」『宮城県公文書館だより』第30号
- ・仙台郷土研究会編 2012 『仙台藩歴史事典 改訂版』
- ・宮城県公文書館 2015 『近代のなかの伊達 歴史学者・大槻文彦と宮城県』